

オオカミの家畜化について知っていますか？ 人文系の大学生にドメステイケーションをどう教えるか

増野高司

Abstract

本報告の目的は、学生らが家畜化に関してどのような知識を持っているのかを把握することを通じ、家畜化を人文系の大学生に、どのように教えるべきなのかを考えることである。具体的には、人文系の大学生を対象にアンケート調査を実施し、どのくらいの割合の学生がオオカミの家畜化、イノシシの家畜化、そして野鶏の家畜化について知っているのかを示す。そして、とくにオオカミを家畜化したものがイヌであることを知っていた学生については、いつ何処でどのように学んだのかを明らかにする。いっぽうで、オオカミを家畜化したものがイヌであることを知らなかった学生については、彼らがイヌをどのような存在と考えているのかを把握することを通じ、その動物観の理解を試みるとともに、家畜化をどのように教えたら良いのかについて考える。結果は以下の通りである。オオカミを家畜化したものがイヌであることを知る学生の割合は約41%（2022年）、イノシシを家畜化したものがブタであることを知る学生の割合は約34%（2021年）だった。オオカミを家畜化したものがイヌであることを知っていた学生は、TV番組を見たり、両親と会話したりすることや、小学校の授業を通じ、子供の頃にオオカミの家畜化に関する知識を得ていた者が多いことが明らかになった。いっぽう、オオカミを家畜化したものがイヌであることを知らなかった学生の割合は全体の約58%（102人、2022年）で、この102人のうち約61%がイヌという野生動物が存在すると考えていた。家畜化に関する知識を持つかどうかは、学生らの動物観に大きな影響を持つと考えられる。人類史における食料生産の開始を考える上で、ドメステイケーションは必須の知識である。しかしながら、これについて知らない学生は意外なほどに多い。人文系の大学生に一般教養科目の中でドメステイケーションを教える際に最も大切なことは、現存するのとは別として、あらゆる家畜および作物には、その祖先種となった野生動物および野生植物が存在していることを学生に理解してもらうことである。

キーワード：栽培化、動物観、犬、イヌ、飼い慣らし、野鶏

1. はじめに

筆者は2021年度および2022年度に、神奈川大学において『文化人類学（一般教養科目、全14回の講義）』を担当した。この講義では

人類史を重視し、その前半では人類の生業活動について多く取り扱った。人類が古くから営んできた生業として「狩猟採集・漁撈」、「牧畜」、「農耕」という大きく3つの生業が知られている。およそ20万年前に現生の人

類が登場して以降、人類は長い間、狩猟や採集を中心とする暮らしを営んできた。これは自然界に存在する食料を生産することなく利用する暮らしだった。しかし、おおよそ1万年前に農耕や牧畜を開始する人びとが現れ、家畜や農作物を生産する暮らしが世界中に広まると、狩猟採集・漁撈を中心とする暮らしを続ける人は少なくなっていった。山本(2009:4)は「人類史上において植物の栽培および家畜飼育の開始は食料の採集から生産へと画期的な変革をもたらしたことが知られており、そのきっかけになったものこそがドメスティケーションであった。したがって、動植物のドメスティケーションは農耕や牧畜の起源とも密接な関係をもつ」と述べた。それまで狩猟採集・漁撈を中心とした暮らしを続けていた人類に対し、ドメスティケーションは食料獲得に生産という革新をもたらしたのである。また、梅崎(2018:35-36)は「ドメスティケーションによって、人間の生存は相対的に容易になり、人口増加率はそれまでよりも高い水準になった。そういう意味で、ドメスティケーションは人類史の中でも大きな発明の一つであるといえるだろう」としている。

ドメスティケーション(domestication)とは、日本語では動物については家畜化、植物については栽培化、などと訳される言葉で、「野生の動物を作り変えて家畜にすること、あるいは野生の植物を作り変えて作物にすること(本江,2009:98)」を意味している。家畜が存在しているから牧畜や畜産業が成立し、作物が存在しているから農耕や農業が成立している。ドメスティケーションを考えることは、野生の祖先種と家畜種・栽培種との相互の関係を考えることとも言える。

「家畜化とはヒトが動物の生殖を管理し、管理を強化していく過程(野沢,2007:391)」とされている。ある動物の生殖を人間が比較的容易に管理できるか否かが、家畜かどうかの大きな基準となっている。そして、「家畜

とは人間が利用する目的で、野生動物から遺伝的に改良した動物」とされる。具体的には「我々人類の祖先が、野生動物を捕らえて飼育し、人間の管理のもとで繁殖させ、長い年月をかけてその有用性を高める方向に育種して、野生の祖先種とは明らかに区別しうる特徴を備えるにいたった動物が家畜である」と説明されている。さらに、人間社会への有用性という観点から家畜を分類すると、農用動物(例えば、ニワトリ、ブタ、ウシなど)、伴侶動物(例えば、イヌやネコなど)、実験動物(例えば、マウスなど)の3つに区分できる。伴侶動物は愛玩動物やペットと表現される場合もある。

上述したように、ドメスティケーションは人類史における革命的な出来事である。過去1万3000年に渡る人類史を描いたダイヤモンド・ジャレド『銃・病原菌・鉄』においても、その前半では人類の食料生産に関し多く議論しており、家畜化および栽培化に繰り返し言及している。家畜化は、動物を育てて利用する、牧畜の展開に深く関わっている。

『文化人類学』の講義では、牧畜や農耕についての講義に先立ち、「ドメスティケーション」を取り上げている。毎回の講義後に受講生たちには、講義への質問や感想を書いたコメントペーパーを提出してもらっている。そして「ドメスティケーション」に関する講義について寄せられるコメントは、毎回、私にとって非常に印象的なものである。なぜならば「ドメスティケーションという言葉は初めて聞いた」、「オオカミとイヌに関係があるとは考えてもみなかった」、「イノシシとブタは似ているとは思っていたが、関係があるとは知らなかった」といったコメントであふれるからだ。また、コメントの多くが自分の言葉を使って驚きや感動を表現したものであることも印象的である。多くの学生らにとって身近な動物や作物の起源を知ることは、興味深い内容だったのである。

このような学生らの反応を見て筆者は、本

講義を受ける以前にどのぐらいの割合の学生がドメスティケーションという言葉や家畜化について知っていたのか興味を持った。そこで2021年10月から12月にかけて、講義のなかでドメスティケーションに関わる試験的なアンケート調査を実施した(増野、2022)。その結果、本講義を受講する以前から「ドメスティケーション」という言葉を知っていましたかという質問に対し、「いいえ、言葉も意味も知りませんでした」と回答した学生が71%にのぼり、オオカミを家畜化したものがイヌだということを知っていた学生は、約45%に止まった。身近なイヌでさえも、その起源について知らない学生は多い。後述するが、ブタやニワトリ(家鶏)の起源について知っていた学生はもっと少なくなる。

我々の暮らしは、家畜利用の側面を考えると、肉類や卵そしてミルクなどの多様な畜産物やイヌやネコのような伴侶動物によって支えられている。ドメスティケーション(家畜化/栽培化)について学ぶことは、人類史における生業の変遷、言い換えれば人類がどのように食料を得てきたのかを考える上で必須であるし、野生動物と家畜そして野生植物と作物との関係を知ることは、野生動物が暮らす自然環境と我々の暮らしとの関係を見つめ直すことに繋がる。学生たちが家畜化について学ぶことは、人類史や人類文化を考える上で重要であると考えられるが、2021年の調査を見る限り、家畜化について全く考えたこともない学生が多く見られる。ドメスティケーションについて学ぶことが重要であることは明らかなのに、ドメスティケーションについて知らない学生は意外なほどに多い。そのいっぽう、講義をしてみるとドメスティケーションは多くの学生が強い関心を抱くテーマである。

大学の講義で家畜化について教えることを考える場合、平均的な受講生が家畜化について、どの程度の情報を持っているのかを知っておくことは非常に重要である。そして家畜

化について全く知らない学生は、イヌやオオカミとの関係をどのように考えているのか、さらにはイヌが地球上でどのような動物だと考えているのだろうか。いっぽう、家畜化について基本的な情報を持つ学生らは、いつ頃何処でどのような方法で家畜化について学んだのだろうか。

本報告の目的は、学生らが家畜化に関してどのような知識を持っているのかを把握することを通じ、家畜化を人文系の大学生に、どのように教えるべきなのか考えることである。具体的には、人文系の大学生を対象にアンケート調査を実施し、どのぐらいの割合の学生がオオカミの家畜化、イノシシの家畜化、そして野鶏の家畜化について知っているのかを示す。そして、とくにオオカミを家畜化したものがイヌであることを知っていた学生については、いつ何処でどのように学んだのかを明らかにする。いっぽうで、オオカミを家畜化したものがイヌであることを知らなかった学生については、彼らがイヌをどのような存在と考えていたのか把握することを通じ、その動物観の理解を試みる。最後に家畜化(ドメスティケーション)をどのように教えたなら良いのかについて考えてみる。

2. 調査方法

2.1. アンケート調査

本報告で中心的に取り扱うアンケート調査の対象は、筆者が担当した『文化人類学』の受講生で、大部分が人文系の学部にも所属する1年次および2年次の大学生である。2022年度前期のアンケートは、選択式と記述式を併用したもので、『文化人類学』の受講生200人を対象として実施し175人から有効回答を得た。アンケートの内容については、結果の部分で触れる。学生らの記述について、明らかな誤字および脱字、文章の誤りについては、筆者の責任で修正した。

先行研究となる2021年の調査(増野、2022)

では、『文化人類学』の受講生140人を対象に選択式のアンケートを実施し、107人から有効回答を得た。2022年度前期の受講生と2021年度後期の受講生は重複していない。

2.2. 家畜化について聞いた動物

世界には多種多様な家畜が存在するが、そのなかで現在の日本人が広く知る家畜として、イヌ、ブタ、ニワトリを選んだ。そして、2021年度後期と2022年度前期のアンケートではオオカミ、イノシシ、ヤケイ（野鷄）の家畜化に関する選択式のアンケートを実施するとともに、オオカミとイヌとの関係について記述式のアンケートを実施した。つぎに各動物の家畜化について簡単に紹介する。

まずオオカミの家畜化について見てみる。「イヌもオオカミも、ハイイロオオカミ (*Canis lupus*) という1つの種に分類される。一般にオオカミと呼ばれている動物はハイイロオオカミであり、北米大陸、北極圏、ユーラシア大陸に分布する（寺井、2023）」。現在イヌと呼ばれているグループとニホンオオカミは遺伝的に非常に近縁で、共通の祖先から2つに分かれたものである。しかし、この共通の祖先はすでに絶滅しており、ニホンオオカミもすでに絶滅している。イヌの学名は *Canis lupus familiaris* である。つまり、オオカミ（ハイイロオオカミ）を家畜化したものがイヌである。オオカミの家畜化の過程がいつ始まったのかについては、いろいろ議論されており3万1700年前だったとする説や、約3万2000年前だったとする説などがある（フランス、2019：41-42）。農耕や牧畜が開始されるずっと以前、人類が狩猟採集・漁撈により暮らしていた時代から、イヌ的オオカミのような動物が人類のかたわらに暮らしていたようである。フランス（2019：43）は、異論もあるが「1万5000～1万2000年前、一部の人間社会は定住傾向が強くなった。おそらくそれが家畜化の過程を加速して、イヌ的オオカミからイヌへの変化を開始したと考えら

れる」と述べている。

つぎにイノシシの家畜化について見てみる（三上、2010など）。ブタの祖先種は、ヨーロッパ、アジア、太平洋島嶼、北アフリカと世界中に広く分布するイノシシ (*Sus scrofa*) である。つまり、イノシシを家畜化したものがブタである。ブタの学名は *Sus scrofa domesticus* となっている。現在のトルコ（西アジア）の紀元前7000年にさかのぼる遺跡から最も古い豚の骨が見つっている。日本にもイノシシが分布しており、弥生時代の遺跡から出土したイノシシの骨のなかにブタの骨である可能性がある骨（「弥生豚」の骨）があることが指摘されている。「古くからイノシシを食用として利用していたことは疑いないが、野生イノシシを管理、増殖し、家畜化の過程にあったかどうかは不明である」としている（三上、2010）。「弥生豚」は大陸からの移住者によりもち込まれたという説もあるという。これまでのところ、日本で家畜化されたとされている動物はウズラのみと考える人が多いようだ。

さいごに野鷄（ヤケイ）の家畜化について見てみる（田名部、2010など）。家畜としてのニワトリを家鷄（カケイ）と呼ぶならば、「その祖先は、現在も東南アジアに野生している赤色野鷄（セキショクヤケイ *Gallus gallus*）である」。つまり、野鷄を家畜化したものが家鷄である。家鷄（いわゆる家畜としてのニワトリ）の学名は *Gallus gallus domesticus* となっている。東南アジアの森林には家鷄の祖先である野生種としてのニワトリが分布している。野鷄も家鷄もどちらも鷄（ニワトリ）なのでややこしい。本稿では野生動物種としてのニワトリを野鷄（ヤケイ）、家畜種としてのニワトリを家鷄（カケイ）と表記し区別する。残念ながら、日本には赤色野鷄も含めて野鷄は分布していない。赤色野鷄が家畜化されたのは、東南アジア大陸部で、紀元前6600年頃と推定されている。鳥類を家畜化したものを家禽と呼ぶ。また鳥

類の家畜化を家禽化と呼ぶことがある。

以上、イヌ、ブタ、家鶏について祖先種との関係を簡単に紹介した。これら3種類の家畜は、いずれも日本人にとり身近な動物と言えるだろう。つぎに調査結果を見てみる。

3. 結果および考察

3.1. オオカミ、イノシシ、野鷄の家畜化への認識

はじめに、どのくらいの大学生がオオカミ、イノシシ、野鷄の家畜化について知っているのかを先行研究である増野（2022）の調査結果を利用することなどから見てみる。表1は、2021年に行ったオオカミ、イノシシ、野鷄の家畜化に関するアンケート結果をまとめたものである。まず、家畜化を考えるにあたり、前提条件として祖先種である野生動物を知っていることが必要である。約9割の学生が、オオカミおよびイノシシという野生動物を

「知っていました」と答えた。「なんとなく知っている程度でした」も合わせると、大部分の学生がこの2種を知っていたといえる。家畜化について講義するにあたり、オオカミやイノシシは説明しやすい動物種だと考えられる。

いっぽう、野鷄については「知っていました」と答えた学生は47%、さらに「知りませんでした」と回答した学生は72%となっており、多くの学生が野鷄の存在を知らないことが指摘できる。野鷄の家畜化を教える際には、野鷄の存在から説明することが必要となる。

つぎに、各動物の家畜化について見てみると、オオカミを家畜化したものがイヌであることを「知っていました」と回答した学生は15.9%、イノシシを家畜化したものがブタであることを「知っていました」と回答した学生は5.6%、野鷄を家畜化したものが家鶏であることを「知っていました」と回答した学

表1 オオカミ、イノシシ、野鷄の家畜化に関するアンケート結果まとめ（2021年）

単位：%

回 答 (合計107名)	オオカミ、イノシシ、 野鷄(ヤケイ)の存在			家畜化について		
	いうオオカミと いう野生動物が いること	いうイノシシと いう野生動物が いること	こと野鷄という 野生動物が いること	うが畜オ がイヌ化カ だしたミを だといの家	うが畜イ がブタ化ノ だといシを の家の家	と鶏野 いう(カケイ)した こと(イ)だのが だ家畜化
知っていました	89.7	88.8	4.7	15.9	5.6	3.7
なんとなく知っている程度でした	6.5	5.6	23.4	29.0	28.0	24.3
知りませんでした	3.7	5.6	72.0	55.1	66.4	71.0
その他	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9

備考：実際の質問事項は次の通りである。オオカミについての質問は、それぞれ「あなたは本講義を受講する以前から、オオカミという野生動物を知っていましたか?」、「あなたは本講義を受講する以前から、オオカミを家畜化（ドメステイケーション）したものがイヌだということを知っていましたか?」である。イノシシについての質問は、それぞれ「あなたは本講義を受講する以前から、イノシシという野生動物を知っていましたか?」、「あなたは本講義を受講する以前から、イノシシを家畜化（ドメステイケーション）したものがブタだということを知っていましたか?」である。野鷄についての質問は、それぞれ「あなたは本講義を受講する以前から、野鷄（ヤケイ）と呼ばれる野生動物としてのニワトリがいることを知っていましたか?」、「あなたは本講義を受講する以前から、野鷄（ヤケイ）を家畜化（ドメステイケーション）したものが家鶏（カケイ、我々が普段食用としているニワトリ）だということを知っていましたか?」である。

出所：増野（2022）を筆者改変

生は3.7%だった。「なんとなく知っている程度でした」を合わせても、オオカミを家畜化したものがイヌであることを知っていた学生は、約45%、イノシシでは約34%、そして野鷄では約28%にとどまった。さらに、オオカミを家畜化したものがイヌだということを「知らなかった」と回答した学生は約55%、イノシシを家畜化したものがブタであることを「知らなかった」と回答した学生は約66%、そして野鷄を家畜化したものが家鶏であることを「知らなかった」と回答した学生は71%だった。野鷄については、野鷄という野生動物の存在自体がほとんど知られていないことを考慮すると、その家畜化について聞くこと自体があまり意味の無いことだったと考えられる。

2022年の「文化人類学」受講生に対し、オオカミの家畜化について同様のアンケート（有効回答者数は175人）を実施した（表2）。その結果、オオカミを家畜化したものがイヌであることを「知っていました」と回答した学生は10.9%、「何となく知っている程度でした」と回答した学生は29.7%、「知りませ

表2 オオカミの家畜化に関するアンケート結果（2022年）

回 答	あなたは本講義を受講する以前から、オオカミを家畜化（ドメスティケーション）したものがイヌだということを知っていましたか？
知っていました	19人 (10.9%)
なんとなく知っている程度でした	52人 (29.7%)
知りませんでした	102人 (58.3%)
そ の 他	2人 (1.1%)
合 計	175人 (100%)

出所：筆者が2022年に「文化人類学」の受講者を対象に実施したアンケート調査

んでした」と回答した学生は58.3%、「その他」と回答した学生は1.1%だった。2021年の結果（表1）と比べ、2022年のアンケート調査の結果では、オオカミの家畜化について、知っていた学生の割合が小さく、知らない学生の割合が大きくなっている。オオカミを家畜化したものがイヌであることを知らない学生が6割近く存在していることが指摘できる。

これらの結果から、筆者は家畜化について知る学生が意外なほどに少ない印象を受けた。皆さまの印象は、どうだろうか。イヌ、ブタ、家鶏という3種類の家畜について見た場合、オオカミとイヌとの関係について知る学生が比較的多い。このほかの家畜として日本人にとって身近な家畜を考えると、ウシや家猫（イエネコ）などを挙げることができる。オーロックス (*Bos primigenius*) を家畜化したものが家畜種としてのウシ (*Bos taurus*) であることや、リビアヤマネコ (*Felis lybica*) を家畜化したものが家猫（イエネコ、*Felis silvestris catus*) であることを「知っている」と回答する学生はどれだけいるだろうか。今後の調査では、これらの動物種についての情報も収集できたらと考えている。

調査結果から、イヌがオオカミを家畜化したものだと知る学生が比較的多いことがわかった。そして、イヌは日本人が実際に触れ合うことができる家畜の代表といえる。これらを考慮して、2022年にはオオカミの家畜化に焦点をあて、記述式のアンケートなども交えながら、オオカミの家畜化について学生らに詳しく聞いた。結果は次の通りである。

3.2. 学生たちはオオカミの家畜化について、いつ頃、どのように知ったのか

2022年に行ったアンケート調査では、オオカミの家畜化について「知っていました」もしくは「何となく知っている程度でした」と回答した学生に対し、「いつ頃、どのような方法で「オオカミを家畜化したものがイヌ」だ

ということを知ったのかについて、わかる範囲で説明してください」という課題を出し、学生に自由に記述してもらった。そして学生らの記述を筆者が読み、その内容を表3にまとめた。

3.2.1. オオカミの家畜化について「知っていた／何となく知っている程度」と回答した学生

まず、オオカミを家畜化したものがイヌだということについて「知っていた (19人)」および「何となく知っている程度でした (52人)」と回答した学生の合計は71人だった (表2)。この71名は、オオカミの家畜化について「自分で調べた」と回答した学生 (13人) と、「自分で調べたのではない」と回答した学生 (58人) の2つに区分できた (表3)。

まず「自分で調べた」と回答した学生は13人 (全体の18.3%) だった。本を調べたとする者が7人、インターネットを調べたとする者が3人、方法について記述できないが自分で調べたとする「方法不明」とする者が3

人見られた。オオカミの家畜化について、自ら調べた者の割合は18.3%で多いとはいえない。調べる方法として本やインターネットが利用されており、本を利用した者が多かった。以下に、本を調べたと回答した学生の記述を紹介する。

事例1 本を調べた学生の記述

小学生の頃、図書室でいろいろな動物が載っている本の中に犬の祖先のオオカミという形で認識したと思う。

事例2 本を調べた学生の記述

犬は元々凶暴で群れを作って行動しているというイメージがあり、実際に小学生の頃に読んだ本でもそういった内容に触れられていた。このため狼を家畜化したのが今でいう犬という認識を持っていました。

事例3 本を調べた学生の記述

この講義を受けるまで狼を家畜化した

表3 オオカミの家畜化について、いつ頃、どのように知ったのか

知った時期	自分で調べた (13人、全体の18.3%)			自分で調べたのではない (58人、全体の81.7%)						合計 [人]
	本	インターネット	方法不明	映像コンテンツ (TV番組・映画・YouTubeなど)	学校の授業	親族 (親や祖父母など)	動物園や博物館	ゲーム コンピューター	その他	
小学生未満	0	0	0	1	1	3	1	0	1	7 (9.9%)
小学生	7	2	0	13	6	4	1	0	2	35 (49.3%)
中学生	0	0	1	3	3	0	0	0	0	7 (9.9%)
高校生	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1 (1.4%)
大学生	0	0	0	1	0	0	0	1	0	2 (2.8%)
不明	0	0	2	5	1	2	1	1	7	19 (26.8%)
合計 [人]	7 (9.9%)	3 (4.2%)	3 (4.2%)	23 (32.4%)	11 (15.5%)	9 (12.7%)	3 (4.2%)	2 (2.8%)	10 (14.1%)	71 (≒ 100%)

備考：四捨五入の影響により割合の合計が100%になっていない部分について「≒ 100%」と表記した。

出所：筆者が2022年に「文化人類学」の受講者を対象に実施したアンケート調査

ものが犬だとはっきりとは知らなかった。しかし、オオカミが人間とかかわりをもつような種類になったものが犬であることは小学生の頃に見た図鑑で知っていた。

事例1、事例2、事例3の記述から、これら学生たちが小学校の頃に、図鑑などの本を見たり調べたりしているなかで、家畜化そのものを調べていたのでは無いようだが、オオカミの家畜化に関する知識を得ていることがわかる。続いて、インターネットを調べたと回答した学生の記述を見てみる。

事例4 インターネットを調べた学生の記述

小学生か中学生の時に家族で旅行に行った際、野良犬を見つけました。その野良犬について家族と話すなかで、野生の犬はいないのかという話になり、スマホで調べた事があり知っていました。

事例5 インターネットを調べた学生の記述

小学生の頃、インターネットでイヌについて調べているときに、イヌの祖先はオオカミであるということを知ったと思う。なぜイヌについて調べようと思ったかは忘れたが、イヌの画像を調べていくうちにオオカミとイヌの関係についての情報にたどり着いた気がする。

事例4における、野生のイヌがいるのかどうかという疑問は、オオカミの家畜化に直結する疑問である。この学生の場合、野良犬との出会いが、家畜化について考えるきっかけとなっている。基本的に野良犬はイヌであり、野良猫はイエネコであり、ともに家畜である。野良犬や野良猫を拾ってきて家で育てることは家畜化ではなく飼慣らしである。

事例5は、インターネットを使い、イヌに

ついて漠然と調べていく中でオオカミとイヌとの関係について知識を得ることに成功している。

つぎに「自分で調べたのではない」と回答した学生は58人(81.7%)だった。このうち、オオカミの家畜化について映像コンテンツ(テレビ番組、映画、YouTube)を通じて知った者が23人、学校の授業を通じて知った者が11人、親や祖父母など親族を通じて知った者が9人、動物園や博物館を通じて知った者が3人、コンピューターゲームを通じて知った者が2人、その他の方法を通じて知った者が10人見られた。オオカミの家畜化について映像コンテンツから知識を得た者が突出して多く、学校の授業および親族を通じて知った者がこれに続いている。映像コンテンツ、親族、動物園や博物館、コンピューターゲームは、学生たちの日常生活と密接な関係を持つと考えられる。この学生たちは、とくに調べたのではないが、普段の暮らしのなかでオオカミの家畜化についての知識を得ている。つぎに、映像コンテンツ、学校の授業、親族、動物園や博物館、コンピューターゲームの順に、学生たちの記述を紹介する。

事例6 映像コンテンツから学んだとする学生の記述

小学生くらいの時にNHKの「ダーウィンが来た！」という番組で確か犬が特集されていて、その番組内で犬の祖先はオオカミであると放送されていて、へーと思ったことがあり、なんとなく知っていた。それでよくみると犬の顔はオオカミに似ているし、共通点を番組で説明をされていて面白かったという記憶が頭の片隅にある。

事例7 映像コンテンツから学んだとする学生の記述

記憶は定かではありませんが、小学生の頃に教育番組か何かを見てオオカミを

家畜化したものがイヌだという事を知ったように思います。イヌの中には、シベリアンハスキーなどのオオカミに似ている種類があるので、オオカミが家畜化されたものがイヌだと聞いて納得した覚えがあり、逆にプードルなど全くオオカミの面影が無いイヌも多いので不思議に思った記憶があります。

事例8 映像コンテンツから学んだとする学生の記述

あるホラー映画の内容が、人間がいなくなった廃墟のようなところで犬だけが存在し、その犬は野生化していて、人間を攻撃し食べるというものだった。そのシーンを見たとき、犬の先祖はオオカミなのではないかと感じた。容姿も犬を凶暴にさせると狼にも似ていますし、ドメスティケーションという単語自体は知りませんでした。犬のルーツが狼だという考えは持っていました。

事例9 映像コンテンツから学んだとする学生の記述

中学生の時、YouTubeで「犬の歴史」に関するドキュメンタリーを見た。現在、人間が飼っている犬が過去にさかのぼるとオオカミを捕獲して人間に適した方式で家畜化したものであること、そのなかで現在の「犬」の形になったことを知った。

映像コンテンツから学んだとする学生の記述では、事例6や事例7のように教育番組や動物に関する番組などからオオカミの家畜化について学んだとする者が見られた。事例8のホラー映画を通じて知ったとする学生の記述を見ると、はっきりと家畜化について学んだというよりも、オオカミとイヌとの関係を察するようになったという印象である。事例9のYouTubeのドキュメンタリーを通じて

知ったとする学生の記述を見ると、オオカミの家畜化を大きく取り上げた番組だったことが推察される。YouTubeに限らずインターネット上の動画配信は、現代の暮らしにおいて多様な知識の入手先のひとつとなっている。つぎに、学校の授業で学んだとする学生の記述を見てみる。

事例10 学校の授業で学んだとする学生の記述

小学校の頃、社会の授業で歴史を学んでいた時、オオカミを狩りに同行させていたのを知った。その時に先生が、オオカミを飼っていたら犬になったという風に教えられた。

事例11 学校の授業で学んだとする学生の記述

小学生の頃に、先生が理科の授業の中で豆知識程度の感覚で「イヌは元々オオカミだったんだよ」と教えてくれたように記憶しています。そのため、オオカミを人が飼っているうちに今のイヌのようになったのだと、なんとなく知っていました。

事例12 学校の授業で学んだとする学生の記述

小学校の理科か社会の授業中にイヌイットの話になり、その際に先生が仰っていた記憶があります。

事例13 学校の授業で学んだとする学生の記述

小学校の頃に、野生の豚は存在しておらず、猪を改良して作られたという話を聞いて面白くと興味を持った。確か理科の時間で先生が身の回りで気になることを質問しようという時間が作られて、その際に犬も元々オオカミから来ているという話を聞いたと思う。

事例14 学校の授業で学んだとする学生の記述

私がオオカミを家畜化したものがイヌだと知ったのは、中学の時の歴史の授業だったと思います。その時の歴史の授業の内容がドメスティケーションについてではなかったので、軽く触れた程度だったので詳しく知っているわけではなかったので、なんとなく知っている程度としました。

オオカミの家畜化について学校の授業を通じて学んだとする11名のうち6名が小学生の頃、3名が中学生の頃と答えており、高校で学んだとする者は見られなかった。また、筆者が担当した「文化人類学」を受講する以前に大学の講義でオオカミの家畜化について学んだとする学生も見られなかった。オオカミとイヌとの関係について、小学校を中心に中学校で学んだと記憶している学生が多い。学生らの記述を見ると、事例10や事例13は家畜化を意識した授業だったように思われる。また、事例11、事例12、事例13は、教員が雑談的にオオカミの家畜化に言及した可能性が高いものの、学生の印象に強く残っていたといえる。

筆者は先行研究（増野、2022：8）において、多くの大学生がドメスティケーションについて知らなかったことについて「高等学校までの教育の中で扱われない事項であることを反映したのだらう」と述べたが、これは誤りである。実際には本報告で示したように、小学校や中学校でオオカミの家畜化について学んだと回答した者が存在している。また、高等学校の地理学の教科書等を見ると、「おもな栽培植物と家畜の起源」の図が示されており、ドメスティケーションは高等教育においても扱われている事項である。ただしオオカミを家畜化したものがイヌであるということを「知っていました／何となく知っている程度でした」とした者は175人の

うち71人（40.6%）と少なく、さらに学校の授業で学んだと回答した者は71人のうち11人（15.5%）で決して多いとは言えない。つぎにオオカミの家畜化について親族から学んだと回答した学生について見てみる。

オオカミの家畜化について親族から学んだと回答した学生は9名おり、学んだ時期について見ると小学生未満が3名、小学生が4名、時期不明が2名だった。子供の頃に学んだ者が多いといえる。以下に、学生たちの記述を紹介する。

事例15 親族から学んだとする学生の記述

小さな頃、犬が大好きな私は、オオカミと犬の違いがあまりわからず、その違いを両親に聞いたところ、大昔、群れからはぐれたオオカミが食料を求め人間に出会い、人間から食料を得ることができるとを学んだ。人間もオオカミが自分たちに危害を及ぼさないことを知り、また猛獣から身を守ってくれることを知ると、お互いに助け合い、狩りをしたりすることにより、人間と共に生活していきようになり、現在の犬に変化していったと教えてもらったから。

事例16 親族から学んだとする学生の記述

小学生の頃、母とオオカミが登場する絵本を読んでいた時に、オオカミの顔がイヌと似ていたため、私が母になぜ似ているのか質問したところ、イヌはオオカミから進化したと教えられたため、なんとなく知っていた。

事例17 親族から学んだとする学生の記述

自分が小さな頃（保育園生の頃ぐらい）、家の近くの人がシベリアンハスキーを飼っており、散歩する姿をみかけるこ

とがあった。その時に親が「昔は、ああ言う犬がオオカミに近いものだったんだよ！」と言ったのを覚えており、犬ってオオカミだったんだと衝撃を受けた。完全にオオカミを家畜化したものがイヌだとは認識はしていませんでしたが、なんとなく知っているという状態でした。

事例18 親族から学んだとする学生の記述

約10年前、家族でイヌを飼っていた際に母親から、イヌはオオカミから進化した動物であると簡単な説明ではあるが教えてもらった。家畜化やドメスティケーションされた動物とまでは教わらなかったがイヌとオオカミの関係については知っていたといえる。

事例15、事例16、事例17、事例18を見ると、幼少期にイヌに興味を持ったり、イヌについて家族と会話したりするなかで、イヌの祖先がオオカミであることに親族が言及している。近くにいる親族の方が、オオカミとイヌとの関係について知識を持っており、これを子供に伝えている。日常生活の中で行われる何気ない会話が、子供の知識の形成に大きな影響を与えていることを示唆している。

人数は少ないものの、オオカミの家畜化について動物園や博物館で学んだとする者(3人)とコンピューターゲームを通じて学んだとする者(2人)が見られた。これらの学生たちの記述を見てみる。

事例19 動物園や博物館で学んだとする学生の記述

私が小さいころ、動物が好きだったので両親によく動物園へ連れていってもらっていたのですが、その際に動物園の説明文などで知ったのと、両親から教えてもらったのではないかと思います。

事例20 動物園や博物館で学んだとする学生の記述

小さい頃、恐竜を含めた動物の博物館でニホンオオカミの展示を見ました。その時は家畜化やドメスティケーションといった言葉は知らなかったのですが、オオカミと犬は同じような種類の生き物だと展示により知りました。

事例21 コンピューターゲームを通じて学んだとする学生の記述

もともとオオカミと犬は姿がだいぶ似ているなと思っていた。あるとき歴史のゲームをしていたところ、犬とオオカミの関係に言及があり、その時に知った。

事例22 コンピューターゲームを通じて学んだとする学生の記述

大学に入学してから、マイクラフトというゲームをプレイし始めました。マイクラフトは、簡単に言うと一種のサバイバルゲームのようなもので、ゲーム内の主人公を自分に見立てて生活していくというゲームです。そのゲーム内で、オオカミが登場するのですが、オオカミに骨というアイテムを与えることで、自分のペットのように手懐けることができます。その際にオオカミが「ワン」と鳴くことから、犬と関係があるのでないかと少し思っていました。

事例19の学生は、オオカミの家畜化について動物園で学んだ可能性が高いと考えている。幼少期に動物園に行く場合、両親と一緒に行く場合は多いだろう。動物園の説明文なのか親の説明なのかは、はっきりしないが、親による説明が動物園で行われたことも考えられる。事例20の学生は、オオカミとイヌとの関係性を博物館の展示から学んだと断言している。筆者としては、動物園や博物館を通じて学んだ学生がもっといても良いと考え

ている。

事例21の学生によると、イヌとオオカミの関係性に言及するゲームが存在することが分かる。どのようなジャンルのゲームなのだろうか。事例22の学生はマインクラフトというゲームを通じてオオカミの家畜化について学んだと考えている。ただし、記述を読んでも、オオカミの家畜化について学んだというよりも、オオカミとイヌとの間に関係があることに気付いたぐらいの印象を受ける。「その他」の方法で学んだという学生（10人）については、記述が不明瞭だったりするため、説明は割愛する。

以上、オオカミの家畜化について「知っていました」もしくは「何となく知っている程度でした」と回答した学生について、一部の学生の記述を紹介することなどからオオカミの家畜化に関する知識をどのように得たのかを見てみた。オオカミの家畜化について、子供の頃にイヌに興味を持ったことで、オオカミとイヌとの関係を知った者が多い。また、自分自身で調べるよりも、日常生活の中で映像コンテンツを見ていたり、両親と会話したりするなかで、その知識をいつの間にか得ている者が多いことが指摘できる。家庭での様々な活動が、子供の知識の形成に大きな影響を与えていることが分かる。家畜化を学ぶ

機会として、学校の授業や、動物園や博物館の果たしている役割が、筆者の予想よりも少ない結果となった。学校、動物園、博物館などにおいて、家畜化を扱っていたとしても、学生にうまく伝わっていなかったり、印象に残らなかったりした可能性があると考えている。

3.3. オオカミの家畜化について「知りませんでした」と回答した学生のイヌをめぐる世界観

オオカミの家畜化について175人の学生のうち102人が「知りませんでした」と回答した。この「知りませんでした」と回答した102人の学生に対し、「イヌはどのような動物で、どこからやってきた動物だと考えていたのかについて自由に説明してください。例えば、イヌを野生動物だと考えていたのでしょうか。イヌを家畜だと考えていましたか。」という課題を出し、学生に自由に記述してもらった。そして学生らの記述を筆者が読み、彼らがイヌをどのようなものだと考えていたのかを表4にまとめた。

学生らによるイヌという存在の捉え方は、大きく7つのグループに区分できた。具体的には、①イヌという野生動物がいると考えていたグループ（62人）、②イヌという家畜が元から存在していたと考えていたグループ

表4 オオカミを家畜化したものがイヌだということを「知りませんでした。」と回答した学生はイヌをどのようなものだと考えていたのか

イヌというものの捉え方	人数[人]	割合[%]
①イヌという野生動物がいると考えていた。	62	60.8
②イヌという家畜が元から存在していたと考えていた。	15	14.7
③考えたこともなかった。	6	5.9
④イヌの祖先はオオカミだと考えていたが、家畜化したものとは考えていなかった。	6	5.9
⑤イヌの祖先はキツネもしくはウマだと考えていた。	4	3.9
⑥野生動物なのか家畜なのか記述していないが、イヌは元からイヌだと考えていた。	4	3.9
⑦その他。	5	4.9
合計	102	100

出所：筆者が2022年に「文化人類学」の受講者を対象に実施したアンケート調査

(15人)、③考えたこともなかったグループ(6人)、④イヌの祖先はおオカミだと考えていたが、家畜化したものとは考えていなかったグループ(6人)、⑤イヌの祖先はキツネもしくはウマだと考えていたグループ(4人)、⑥野生動物なのか家畜なのか記述していないが、イヌは元からイヌだと考えていたグループ(4人)、⑦その他と回答したグループ(5人)である。

オオカミの家畜化について「知りませんでした」と回答した学生の約6割が①イヌという野生動物がいると考えていたグループに含まれた。家畜化を想定していないのだから、イヌという野生動物が存在しており、これを家に連れてきて飼育していると考えことは、事実とは異なるが、考え方としては素直だろう。同様に、家畜というものが自然に元から存在すると考えた場合、②イヌという家畜が元から存在していたと考えていたという回答も、事実とは異なるが、素直な考え方である。⑥野生動物なのか家畜なのか記述していないが、イヌは元からイヌだと考えていたグループは、イヌは元からイヌである点では①と②の考え方に準ずるが、野生動物と考えていたのか家畜と考えていたのかについて明言しない点で、ちょうど①と②の中間的な考え方といえる。①グループ、②グループ、⑥グループは、イヌが元からイヌとして存在するものと考えている点では共通の考え方を持つグループである。③考えたこともなかったと回答したグループは、講義を受講したうえでの素直な意見なのだろう。④イヌの祖先はおオカミだと考えていたが、家畜化したものとは考えていなかったグループと⑤イヌの祖先はキツネもしくはウマだと考えていたグループは、イヌについて祖先種の存在を想定している点で①、②、⑥とは全く異なる考え方である。「⑦その他」は①から⑥のグループに区分できなかつたグループで、記述が難解だったりするため、説明は割愛する。

それでは、①から⑥のグループについて、

その回答の記述を見てみよう。まず①イヌという野生動物がいると考えていたグループの学生の記述を見てみる。

事例23 ①イヌという野生動物がいると考えていた学生の記述

太古に生息していた動物が、様々な天変地異や気候変動などに伴って生じた環境の変化に適応していく中で、現在のイヌが形成されていったと考えていた。

事例24 ①イヌという野生動物がいると考えていた学生の記述

ドメスティケーションという概念が自分にはなかつたので、過去の自分は人類の進化のように突然変異が起き、その気候などのなかでイヌが進化してきたと思っていました。

事例25 ①イヌという野生動物がいると考えていた学生の記述

イヌは、忠犬ハチのような秋田犬とシベリア犬が主流で、トイプードルやチワワは雑種と捉えていたため、シベリアや北欧の寒冷な地域から南下する形で日本に来た野生動物だろうと考えていた。そのため、イヌは寒冷な地域に生息する野生動物と考えていた。

事例26 ①イヌという野生動物がいると考えていた学生の記述

私はイヌを野生動物だと思っていました。イヌの中でも日本犬と分けられる甲斐犬、秋田犬などがいるがそれらは日本で発見されたイヌでポメラニアンとかプードルはヨーロッパから来たイヌだと認識していました。しかし、都合良く飼われる動物なんてないだろうと思っていたので頭のどこかではイヌは人間が人工的につくつたのではないかと感じる部分もありました。

**事例27 ①イヌという野生動物がいると
考えていた学生の記述**

犬はもともと存在する固有の種であると考えており、野生動物であるとも考えていた。狼とは遠い親戚のようなもので関係はあると思っていたが、「オオカミを家畜化したものがイヌ」であるという直接的な関係が2種の間に存在しているとは考えたことがなかった。

**事例28 ①イヌという野生動物がいると
考えていた学生の記述**

オオカミがイヌの祖先であることは知っていましたが、オオカミを家畜化したものがイヌだということは知りませんでした。オオカミが生きていくうえで進化して、イヌになったものを人間が発見し、人間が生活に利用するために飼いならしたのだと考えていました。授業を聞くまでイヌを家畜とは考えていませんでした。ペットという家族の絆で結ばれていることが多く、生活のために利用する事例は身近にないため、家畜とは考えませんでした。

事例23と事例24は、人間との関係を想定せず、イヌは自然に生まれた動物だと考えていた事例といえる。事例25は、イヌを寒冷な地域の野生動物だと考えていたという。秋田犬が寒さに強い犬種であることや、イヌが雪の中、そりを引くイメージなどが影響していることが考えられる。事例26は、日本では自然のなかに日本犬が暮らしており、ヨーロッパに行くとき自然のなかにポメラニアンなどの犬種が暮らしていると考えている。これは①イヌという野生動物がいると考えていたグループの学生の世界観をよく現した記述である。また事例26の学生は、人間がイヌを人工的に作り出した可能性を考えている点は面白い視点である。事例27と事例28は、オオカミとイヌに関係があることは知っていた

が、両者を別種の野生動物だと考えている事例といえる。事例28の記述の後半部分は、飼い主と家族の絆で結ばれているペットなのだから、イヌは家畜ではないと述べている。この考え方は、私の講義を受講した学生の多くが共有する考え方である。山田『家族ペット』の出版から20年が経過し、イヌは家族の一員となっているようだ。

つぎに②イヌという家畜が元から存在していたと考えていたグループの学生の記述を見てみる。

**事例29 ②イヌという家畜が元から存在
していたと考えていた学生の記
述**

昔の映画などで寒い地域の人たちが犬にソリを引かせていたし、現在も元は狩猟犬だったという犬種が存在しているため、以前からイヌは人のために働く家畜であると思っていた。またソリを引くイメージから、イヌは寒い地域からやってきたものだと思っていた。

**事例30 ②イヌという家畜が元から存在
していたと考えていた学生の記
述**

小さい頃には、家で犬を飼っていただけで、犬は家畜だと思っていました。講義内で犬はオオカミをドメスティケーションした動物であると学びましたが、今までは犬とオオカミの関係性については、オオカミはイヌ科であると認識していました。トラをネコ科と認識しているのと同じように、トラをネコの祖先だとは思わないです。

事例29はそりを引くイヌと狩猟犬の存在を根拠として、イヌが元々家畜だったと考えていたと述べている。前述の事例25や事例29のように、イヌと寒冷地を結びつける記述は複数の学生に見られた。イヌが寒冷地に

暮らす動物であるとする学生は多い。事例30の学生はイヌを飼育していた経験を持ち、オオカミはイヌ科、トラはネコ科というように動物に対する知識も豊富であるようにみえる。トラとイエネコは同じネコ科であっても別種なのだから、オオカミとイヌも同じイヌ科であっても別種に違いないとの意見は、事実とは異なるが、不思議と説得力がある。イヌもオオカミも、ハイロオオカミ (*Canis lupus*) という1つの種に分類される(寺井、2023)。しかしながら、実際問題として、トイプードルを見て、オオカミを連想することは、私には難しい。

それでは、③考えたこともなかったグループの学生の記述を見てみよう。

事例31 ③考えたこともなかった学生の記述

犬がオオカミを家畜化したものだと知らなかった。昔から犬や猫など動物が好きだったが、犬がどのようにして生まれたのか考えたことがなかったので、知らなかった。

事例32 ③考えたこともなかった学生の記述

まず犬の祖先などといったものを考えたこともなかった。「どのような動物でどこからやってきた」というのも考えたことがなかったし、私たちの生活する世界の中で昔から当たり前前の存在であると感じていた。

事例31の学生は、自身がイヌも含めて動物が好きだと述べているが、それでもオオカミとイヌとの関係について考えることは無かったようだ。事例32の学生はイヌの祖先について考えたことはなかったと述べている。これは、野生動物かどうかについて言及していないが、①イヌという野生動物がいると考えていた事例と似た考え方の事例だと考

えられる。

つぎに④イヌの祖先はオオカミだと考えていたが、家畜化したものとは考えていなかったグループの学生の記述、⑤イヌの祖先はキツネもしくはウマだと考えていたグループの学生の記述、⑥野生動物なのか家畜なのか記述していないがイヌは元からイヌだと考えていたグループの学生の記述を順に見てみる。

事例33 ④イヌの祖先はオオカミだと考えていたが、家畜化したものとは考えていなかった学生の記述

犬の祖先がオオカミだという話は、子供の頃によく聞いていましたが、オオカミが家畜化した要因が人間の影響によるものとは知りませんでした。人間の活動とは関係なく、オオカミらが自然と人里に適應するようになったものと思い込んでいました。

事例34 ④イヌの祖先はオオカミだと考えていたが、家畜化したものとは考えていなかった学生の記述

犬とオオカミは姿や形が似ているため、類人猿が進化したものが人間のようには、犬はオオカミが進化した姿であると考えていた。

事例35 ⑤イヌの祖先はキツネもしくはウマだと考えていた学生の記述

イヌはキツネをドメスティケーションした動物であると考えていました。キツネは妖怪といわれている点や、神の使いとされていて神社に祀られていることもある点から大昔からキツネは存在している動物だと思っていました。またキツネの容姿がイヌに近いので、大昔からいるキツネをドメスティケーションした動物がイヌであると考えていました。

事例36 ⑥野生動物なのか家畜なのか記述していないが、イヌは元からイヌだと思っていた学生の記述

北の国では犬ぞりなどがあるので、犬は元々犬で、北の方の国からやってきた動物だと思っていました。

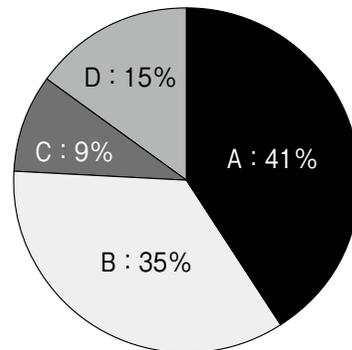
事例33と事例34の学生は、イヌの祖先がオオカミであることを知っていたが、人間の活動の影響ではなく自然にオオカミとイヌという別の種に分化したと考えている。実際には、オオカミを家畜化したものがイヌなので、イヌは人間の影響により生まれたものであるし、オオカミとイヌは生物としては同じ種に含まれる動物である。事例35の学生は、イヌはキツネを家畜化したものだと思い込んでいたという。この他に2名の学生がイヌの祖先はキツネ説を記述していた。キツネもイヌ科の動物なので、当たらずとも遠からずの範疇だろうか。事例36の学生は野生動物なのか家畜なのかははっきり記述されていない。この学生もイヌが寒冷地の動物だと考えていることがわかる。ひとことにイヌと言っても、その姿形は犬種により大きく異なっている。イヌと言われたときに、どのようなイヌを想像するのかは、その人のイヌとの関わり方により様々だと考えられる。例えば日本犬のうち、秋田犬ならばオオカミと似た姿形をしているし、上述のトイプードルの姿形はオオカミとはずいぶんと異なる印象を受ける。また、秋田犬が遠吠えする姿を見たならば、オオカミとの関係を否応無しに連想させられる。イヌとオオカミとの関係に思考をめぐらせるにあたり、身近なイヌの犬種が何であるのかは重要な要素だと考えられる。

4. 人文系の大学生に家畜化をどのように教えるべきか

最後に、人文系の大学生に家畜化をどのように教えるべきか考えてみる。本報告のま

めとして、大学生らがイメージするイヌの起源を示した(図1)。全部で175人の学生のうち、イヌがオオカミを家畜化したものだと知っていた学生は71人、イヌという野生動物がいると考えていた学生が62人、イヌという家畜が元から存在していたと考えていた学生が15人となっている。なんと62人(35%)もの学生がイヌという野生動物が存在する動物観のなかで暮らしていたのである。この動物観は、筆者にはずいぶんいびつだと感じられる。彼らにはドメスティケーションについて学び、動物観を刷新してもらう必要がある。

ドメスティケーション(家畜化・栽培化)は人類史において食料の採集から生産への変革のきっかけとして重要なもの(山本、2009:4)であり、人類史の中でも大きな発明の一つである(梅崎、2018:35-36)。人類史を理解するうえでドメスティケーションについて学ぶことが重要であることは明らかである。しかしながら、調査対象とした大学生のなか



- A: イヌがオオカミを家畜化したものだと知っていた学生 (71人)
- B: イヌという野生動物がいると考えていた学生 (62人)
- C: イヌという家畜が元から存在していたと考えていた学生 (15人)
- D: A、B、Cに含まれない学生 (27人)

図1 大学生がイメージするイヌの起源まとめ

出所: 筆者が2022年に「文化人類学」の受講者を対象に実施したアンケート調査

で、オオカミを家畜したものがイヌであることを知る学生は約41%で多いとはいえないし、オオカミを家畜したものがイヌであることを知らないと回答した学生は約58%で半数を超えている（表2）。すでに示したようにイノシシや野鶏の家畜化について知る学生はもっと少なくなる（表1）。このため半数を超える学生が家畜化について全く何も知らないことを想定して講義を行う必要がある。

オオカミの家畜化ですら5割以上の学生が初めて聞く内容である可能性を考慮すると、あまり複雑な説明をする必要はない。オオカミを家畜化したものがイヌ、野鶏を家畜化したものが家鶏、イノシシを家畜化したものがブタであることを単純に伝えることが大切である。家畜の野生化の話題や交雑の話題は、とても専門的な話題だと考えた方がよい。うっかり家畜の野生化に触れたりすると、授業後に提出してもらうコメントペーパーが捨て猫を捨てたり野良犬を保護したりしたエピソードであふれることになる。捨て猫や野良犬は、すでに家畜であって野生動物ではない。

オオカミとイヌ、野鶏と家鶏、そしてイノシシとブタが基本的には同じ種で近縁であることは、学名を紹介すると学生が素直に理解してくれる。ハイイロオオカミの学名は*Canis lupus*、イヌの学名は*Canis lupus familiaris*、そしてイノシシの学名は*Sus scrofa*、ブタの学名は*Sus scrofa domesticus*と紹介するだけで良い。属名と種小名が同じなので理解し易かったり、事実だと信じ易かったりするようだ。イヌが大好きでイヌのことをよく知っていると思っている学生であっても、オオカミとイヌとの間の関係について考えたことがない人は多い。学生の35%がイヌという野生動物が自然に存在していると考えているのだ（図1）。イヌがオオカミを家畜化したものだと言っても、その場では納得いかない学生もいる。写真を使い口頭で説明しても信じてもらえない場合でも、学名を確認してもらうことで、諦めがついたためなのか、納得して

もらえる。

人文系の大学生に一般教養科目の中でドメスティケーションを教える際に最も大切なことは、現存するのとは別として、あらゆる家畜および作物には、その祖先種となった野生動物および野生植物が存在していることを学生に理解してもらうことである。ドメスティケーションの基本を知るだけで、スーパーマーケットの精肉売り場や、生鮮野菜売り場の見え方がこれまでと変わってくる。栽培植物について説明する中で、阪本（2007：97）は「栽培植物はもっとも価値の高い文化財といえる」とした。家畜も栽培植物（作物）と同様である。家畜や作物は、人類が数千年や数百年の時間をかけて作りあげた有形の文化財である。ドメスティケーションについて学ぶことで、イヌやブタが人類の文化財であることが理解できるようになる。このような素晴らしい文化財を利用できることの喜びと一緒に分かち合える仲間を増やしてゆきたいと考える。

謝辞

神奈川大学『文化人類学』受講生の皆さまには、本報告に関わるアンケートに回答いただくとともに、講義に対するたくさんのコメントをいただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

引用文献

- ダイヤモンド・ジャレド著、倉骨彰訳（2012）『銃・病原菌・鉄（上巻・下巻、文庫版）』草思社。
- フランシス・リチャード・C. 著、西尾香苗訳（2019）『家畜化という進化：人間はいかに動物を変えたか』白揚社。
- 本江昭夫（2009）「ドメスティケーションと

- は何か：家畜とは何か』『国立民族学博物館調査報告（山本紀夫編：ドメスティケーション—その民族生物学的研究—）』84：97-115.
- 増野高司（2022）「ドメスティケーション（家畜化・栽培化）を知っていますか？：大学生を対象としたアンケート調査から」『家畜資源研究会報』20：4-9.
- 三上仁志（2010）「ブタ」正田陽一編『品種改良の世界史・家畜篇』悠書館、pp.317-366.
- 野沢 謙（2007）「家畜化」下中直人（編集発行）『世界大百科事典5』平凡社、p.391.
- 阪本寧男（2007）「栽培植物」下中直人（編集発行）『世界大百科事典11』平凡社、pp.96-100.
- 正田陽一（2010）「総説 家畜育種の歴史と遺伝学の進歩」正田陽一編『品種改良の世界史・家畜篇』悠書館、pp.1-22.
- 田名部雄一（2010）「ニワトリ」正田陽一編『品種改良の世界史・家畜篇』悠書館、pp.368-406.
- 寺井洋平（2023）「日本犬とニホンオオカミの関係をゲノムから知る」『ビオストーリー』40：77-83.
- 梅崎昌裕（2018）「文化としてのドメスティケーション」高倉浩樹編『総合人類学としてのヒト学』放送大学教育振興会、pp.23-37.
- 山田昌弘（2004）『家族ペット：やすらぐ相手は、あなただけ』サンマーク出版.
- 山本紀夫（2009）「はじめに」『国立民族学博物館調査報告（山本紀夫編：ドメスティケーション—その民族生物学的研究—）』84：1-14.